



秋田 喜代美
東京大学大学院教授

温かな言葉の園風土

年に1度、伺っている園を訪問した。その園では、子どもの話をじっくり聴こうとする時の先生の目線位

置が、いつも子どもより低い。それが、どの先生でも同じである。

あるクラスで、先生がギターで伴奏し、みんなで歌を歌い始めた。その時、落ち着かず、後ろを向いたり動いたりしている子がいた。私は、先生はどうされるかなと見ていた。

「〇〇君も、続き、歌えるよね」。

1番を歌い終えた後の間奏の時、先生が穏やかな声で伝えた。その子はこっくりうなずき、2番からはずっと参加していった。そして、その歌は途切れることなく続き、何事もなかったように穏やかに終わった。

私が見てきた多くの場面では、「〇〇君、ちゃんと前を向いて」「みんな歌っているのに何している

トある？」とその子に尋ねてみんなとの間をつなぎ、輪の中に入れていかれた。

この園では、どのクラスを見ても、温かな言葉を保育者が共有している。言葉のトーンや丁寧さは園全体に伝わり、園の風土を醸し出す。保育者の配慮ある言葉に、専門家としてのぬくもりを感じる。たった一言

保育者の専門性が良質な経験を生む

の」という言葉掛けも多い。しかし、今回は、他の子どもが歌っている雰囲気壊さない先生の温かな言葉掛けで、歌は余韻を持って終わった。

別のクラスでは、帰りの会を見せていただく。その時にも一人、落ち着かない子がいた。そして、何を歌おうかという時、先生は「リクエス

でも、それが温かくも冷たくもなることに気付き、具現化している保育者の専門性に敬意を払いたと思った。保育者の言葉が雑な園は、子どもの言葉も乱暴である。良質な言葉経験をどの子どもにも保障したい。

今回は12月12日付掲載